

デザインは 柔らかく頭で考える

TAKAO 599 MUSEUM（東京都八王子市高尾町）では、開館1周年と今年から国民の祝日になった山の日を記念して、「TAKAO 599 祭り」が8月1日から14日まで開催された。山の日当日の11日には、「TAKAO 599 TALK ～“84プロジェクト”から学ぼう！山・森の魅力の伝え方～」が開催され、講演やトークセッションが行われ来場者は100人を超え盛況だった。（撮影：石井蓮 取材・文：小川 茜）



鈴木輝隆教授



大黒大悟さん



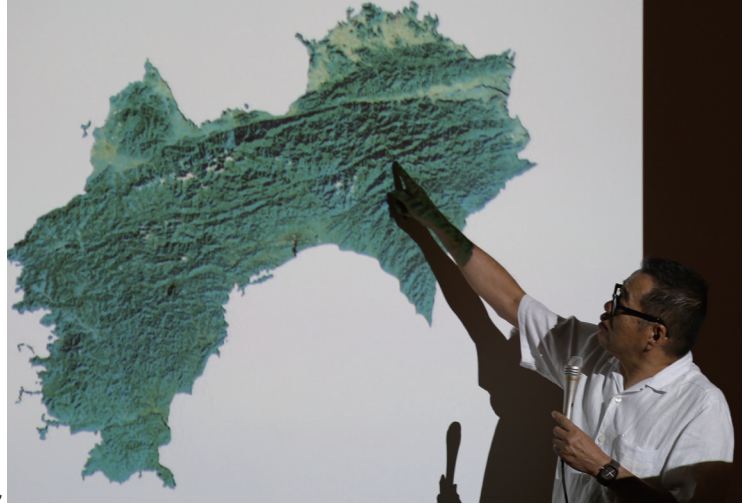
沖修司さん



高尾 599 ミュージアム。館名は高尾山の標高 599m にちなんで命名された。



祭りは、林野庁も後援している。11日には施設全体で約7000人が来場した



梅原真さん

第2部のトークセッション「山・森の豊かさ」とデザインとの関係を考える」では、梅原さんに、林野庁次長沖修司さんと日本デザインセンター大黒デザイン研究室主宰大黒大悟さんが加わり、本学社会学部現代社会学科特任教授の鈴木輝隆先生がセッションコーディネ

ーターを務めた。鈴木先生は高尾599ミュージアム連絡会の座長でもある。沖さんは「山や森の豊かさ」はデザインの発想の転換で変わるという。森林は人間が永い年月をかけてダイナミックに変化させてきた。これからは市民の皆さんと一緒に、デザイン力で自然や山を身近なものにしていくことが、新しい森林作りではないかと語った。

大黒さんは「高尾599 ミュージアムの特長はアーカイブとサイエンス×ヒューマン×設計デザインを解説。ほかの博物館とは違い、広さと展示数で勝負はしない。この土地でしか完成しないミュージアムを作り上げ、山や森にたいしての好奇心を掻き立てる場所にした」と熱弁する。

梅原さんは二人の話を聞き「人工林が原生林より多いのは人のせい。外材が主流になったのは日本材の良さを保つためにはお金が掛かってしまうから。でも84プロジェクトのようなやりかたもある」という。

デザイン意識が意外性を生む

そんななか、梅原さんは「市議会議員ならタマホームとタイアップして、多摩産材から屋根や椅子付きのバス停を作るくらい大きく考える」と斬新で話題性がある」と提案し、会場の度肝を抜いた。



第1部キーノートスピーチでは、梅原デザイン事務所主宰の梅原真さんが、「山・森の豊かさを様々な表現する84プロジェクト（はちよんプロジェクト）とは？」と題し産業をデザイン的に考える、デザイン思考の大切さについて語った。

梅原さんは高知県生まれ。高知県は、森林率84%と日本一の森林県。しかし、外材が安く手に入ることで経済的に悪化。さらに、経済活動のできる平地はわずか16%しかない。梅原さんはそれを逆手にとり、84プロジェクトとして、この豊かな資源を産業として活かさないかと革命的な案を出していく。

その象徴が8年前にデザインした「84おじさん」。日本一の森林率「84%」という数字を背負い腰に手を当て自慢しているおじさん

のことだ。キャラクターがはっきりとしたことで事業のコンセプトも共有された。デザイン思考であらたな価値が発見された森林を、有効に利用していくという考えが広まった。現在では森林も整備され、デザインされた「84」がロゴマークとしてつかわれ、さまざまな森林グッズも販売されている。梅原さんが苦労を乗り越えて話す姿からは、幾度となく笑いと拍手が沸きあがった。

八王子市議の及川賢一さんから「多摩産材のじょうずな使い道とは？」との質問にたいして沖氏は「デメリットをメリットに、使いにくさを生かして使っていくべき」、大黒さんは「何をやるかよりも、なぜやるのか、新しいものを作り出すには、その仕組みを考えて知ることが大切」と答えた。